

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その71

文：長谷沼 清吉

高目の大清水と小清水の小さな清水

高目には大清水があります。清水は右図の通りで広さ約140㎡、2本の堰に分水し、1本は高目の飲用として利用され、田も潤しています。また、もう1本は南流して水田に利用されています。この清水の保護のため、藩では安永9年（1780）、大峯に約8,000㎡を水林（水源涵養林）にして、村民に撫育（大切に育てること）を命じています。

幕末、塔寺八幡神社再建のため、清水協の神社社木4本の伐採を命ぜられると、伐れば減水で300石余の減収になるとして、高目・漆窪・平明村肝煎より用捨（社木を伐らないように）の願いが出されます。そこには3ヶ村のほか、原・新村・樟山村まで影響があるとありましたが、減水の心配はないと聞き届けられませんでした。

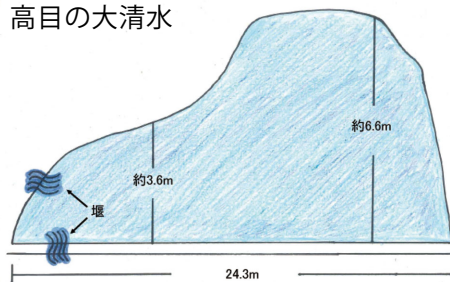
嘉永6年（1853）5月23日、少しの雨が降りましたが、その後6月は1回の小雨だけで大干ばつになりました。高目と小清水で寄合をして、毎日1人が見回り、ひどい所から水をかける押水おしみずをすることにしました。押水は7月27日の大雨まで続けましたが、焼石に水でこの年は大凶作となりました。明治9年（1876）と明治19年（1886）も大干ばつで、嘉永にならって村全体で惣押水をしています。

集落名の小清水の由来は、小さな清水からになります。この清水には2つの水舟があり、上の丸い舟は馬が利用しました。人の利用する舟の上、それだけ馬を大事にしたことが分かります。馬は中追馬として喜多方と津川を往復して米と塩を運び、その駄賃は山三郷の最大の現金収入といわれていました。

また、この清水を利用して、明治4年（1871）には長谷沼久七が酒造りを始めます。奥川の高橋儀三と岩橋富内も許可されています。明治4年の酒貸取立帳には16ヶ村があり、弥平四郎藤四郎の名もありました。なお、酒の値段は明治9年1升上酒6匁（銭）、並酒5匁となっています。

（参考文献『長谷沼守家文書』『長谷沼勉家文書』）

高目の大清水



今月の表紙

今月は、第33回西会津雪国まつりで2月11日の夕方に行われた歳の神から。今回は、歳の神の点火に合わせて、大山さゆり太鼓の皆さんが演奏を披露しました。来場者の皆さんは、燃え盛る炎を見つめ、響き渡る和太鼓の音に耳を傾けながら、今年1年の無病息災を祈っていました。（8ページから関連記事）

編集後記

3月13日から、マスクの着用が個人の判断に委ねられることになりました。コロナ禍に広報紙を作っていく中で困ったことは、イベントなどの中だけではなく、マスクの着用が当たり前になつたと。表情を撮ることがなかなか思うようにできないことも多く苦労しました。これから少しずつ、場面に応じてですが、いろいろな方々の表情をもっとお届けできると期待しています。（秦）